

博士論文概要書

『ローティの思想における一貫性 ～その解釈学的側面について』 The Coherence of Rorty's Thought —On the hermeneutic side—

大賀祐樹

1 論文の目的

リチャード・ローティはそのキャリアにおいて、始めは分析哲学の専門家としてスタートさせ、やがてウィリアム・ジェイムズやデューイといった古典的なプラグマティズムやハイデガーやデリダといったヨーロッパの「現代思想」に関する考察も行なう哲学者として議論の幅を広げ、そしてリベラリズムやアメリカの左翼に対する考察といった政治思想における議論も行なっており、その記述において言及される夥しい量の人名やタームが関連するジャンルは大変幅広い。また、ローティの議論はその独特な立ち位置による独自の視点からなされているために、各ジャンルにおいても強い刺激を与えるものとなっており、様々な論者がローティの議論を自説の補強のために用いたり、あるいは批判したりしている。

日本においても、ローティの思想を紹介した野家啓一、富田恭彦や、独創的なリベラリズム論に着目してロールズとの類似性をしてきた渡辺幹雄、プラグマティズムの教育論においてデューイとの比較研究や現代の教育論におけるローティの意義についての考察を行なった柳沼良太等の先行研究が存在する。しかし、それらの研究はもともと各研究者が専門としていたジャンルに地盤を置いた、特定の視点からのローティ像であり、必ずしもローティの思想そのものを満遍なく俯瞰するものではなかった。そのため、ローティの思想の全体像をバランス良く描く必要があると言える。

そこで、その全体像を明らかにするために最も比重を置いたのが、本論文のタイトルとして掲げている通り、その一見すると雑多に見えかねない思想を「解釈学」というタームを鍵にして一貫性を見抜くことである。一般に、ローティは「解釈学」の思想家であるというイメージはあまり存在せず、ローティの思想と言えば「プラグマティズム」、あるいは「ネオ・プラグマティズム」の方が先に思い浮かぶであろう。しかし、主著の一つとして挙げることができる『哲学と自然の鏡』では、その結論部分において、これからの哲学の在り方として「解釈学」を最も望ましいものとして大々的に取り上げているのである。ところが『哲学と自然の鏡』以降のローティの著述においては、ほとんど全くと言っていいほど「解釈学」というタームの使用が見られなくなる。とはいえ『哲学と自然の鏡』における主張と、それ以降の主張において様々な用語の使用頻度の変化はいくらか見られるものの、その基本的な主張は一貫しており、大きな変

化は見られない。では、あれだけ大きく取り上げた「解釈学」は、ローティの思想において一体どこに行ってしまったのだろうか。全く無かったものとして放棄されてしまったのか、それとも「解釈学」というタームの使用、もしくは不使用によって表面的には見えないものの、何か形や名を変えて引き継がれていたのだろうか？この点が、本論文における最も主要なテーマである。直接、ローティにおける「解釈学」の考察を行なったのは、第三章「解釈学的転回」、第十章「ローティの文学論」、第十一章「ローティの哲学における解釈と真理」の三つの章においてであるが、他の章においてもローティが言及した様々なジャンルにおいてその思想の基底を流れる「隠れた本流」としての解釈学的な発想を意識してまとめるように試みた。

2 論文の構成

本論文は、第一部「ローティの哲学における出発点」、第二部「思想の展開～ネオ・プラグマティズムと政治への参加」、第三部「ローティの思想を貫くものとしての解釈学と物語」という三部構成となっている。

まず、第一部においては主に 1979 年の『哲学と自然の鏡(*Philosophy and the mirror of nature*)』に至るまでの思想形成と、その後に引き継がれることとなるローティの思想の哲学における出発点を探った。

第 1 章「ローティの生涯と思想形成」においては、ローティの生涯を伝記的にまとめることによって、その思想の形成過程を追った。ローティの両親は 1930 年代から 50 年代にかけて活動した、労働運動等を支援する社会運動家であり、またその一族や友人、知人も同じように社会運動に関わる人が多く、幼い頃のローティもその姿を見て大いに影響を受けたという。しかし、少年期のローティはそのような社会的正義の理想と自らが志向する耽美的な趣味との両立に悩み、その両者の合一を目指して哲学を志した。そこから、全ての考え方を単一のものへと統合するプラトニズムへ関心を持つが、結局のところそれに幻滅し、やがてプラグマティズム的な方向へと転回していく。このような幼少期から青年期にかけての逡巡が、一見すると両立し得ない様々な思想を両立させてしまうような独自の発想の源となった。

第 2 章「認識論的転回と言語論的転回」においては、ローティが『哲学と自然の鏡』において採用したクーン的な非ホイッグ主義に基づく「哲学史」の観点に則って、ローティ以前の哲学史を検討した。西洋の哲学は、ギリシャにおいて「真理」を観照するためのものとして始まり、デカルトによってその「真理」を観照するためにわれわれがいかにして物事を認識しているのか、というように問題点が転回し、フレーゲ、ラッセル、ウィトゲンシュタインらによってその「認識」の論理構造がどのようになっているのか、ということの問題とするように転回したが、ローティによるとそのような哲学における転回は自然のありのままの姿を歪み無く映しとるための「鏡」であることを常に希求していたため、本質的な点においては全く変わっていなかった。ローティは初期の論考において、心身問題に対する「消去的唯物論」という立場を採っていた。心身二元論に反対する一元論の立場としては「翻訳型」と「消去型」があったが、ローティはすべてを中立的な概念へ還元してしまう「翻訳型」ではなく、よりプラグマティックな「消去型」

を採用している。しかし、そもそも心身を一元的にとらえるという考え方そのものが「鏡」を求めるような態度といえるため、後によりプラグマティズムに近い「認識論的行動主義」へと変化し、そして最終的には心身を精神と物質という区分に限らない様々なメタファーによって理解するという「非還元的物理主義」へ至っている。

第3章「解釈学的転回」においては、クーン、クワイン、デイヴィッドソン等の科学哲学、言語哲学の論点を理解し、ローティがそれを取り入れることによってどのように自らの思想の独自性を築いていったかということを探っている。クーン、クワイン、デイヴィッドソンはそれぞれ英語圏の科学哲学や言語哲学の文脈の上で議論を行なったのだが、ローティは彼らの思想に「解釈学」的な観点を見出す。それは、クーンも依拠しているハンソンの実験や観察における「理論的負荷性」を、ガダマーにおける「先入見」と同等のものと見なし、クワインとデイヴィッドソンが一見すると理解することが不可能なほどに相容れない他者との間の会話における「翻訳」や「解釈」において提出した根底的な理解の方法を、ガダマーにおける「地平の融合」と相似するものと見なすというようなもので、アメリカとドイツという20世紀以後においては断絶してしまった二つの思想圏の間に似たような発想を見出し、架け橋をかけるものであった。ローティは『哲学と自然の鏡』の結論部分において、今後の哲学における好ましい在り方として「解釈学」を挙げているが、それ以後のローティの論考において「解釈学」というタームが使用されることはなくなった。その後のローティの思想における「解釈学」の問題は第11章において扱った。

第二部「思想の展開～ネオ・プラグマティズムと政治への参加」においては、ローティが1980年代以後により明確に打ち出すこととなった「ネオ・プラグマティズム」の独自性と、その立場から行なったりベラリズムの擁護や政治的参加へ積極的な左翼の擁護といった政治思想に関する議論を、それまでの哲学に関する議論との間の一貫性に注意を払いながら考察した。

第4章「偶然性のリベラリズム」においては、ローティがいかにして一見すると相容れない哲学の在り方とリベラリズムの擁護とを両立させるかという点を検討している。ローティは理想的な世界を「リベラル・ユートピア」と名付け、そこに住む住人は「ミルの仮面をかぶったニーチェ」のように、自らの価値観においては「アイロニー」の思想をボキャブラリーとしながら、近代的なりベラリズムとデモクラシーに則った社会制度を擁護する「リベラル・アイロニスト」であるとした。そこから、「自由」の概念を哲学的に必然性の下に基礎づけるのではなく、偶然性と可謬性の承認による枠組みとしてのものとすることによって、あらゆる人が偶然的に何らかのボキャブラリーを受け入れ、それらが互いに相容れないことがあるのであれば、「哲学」を政治的な問題から排除することによって衝突を防ぎ、「残酷さ」と「苦痛」が生じることを回避するというミニマムな原則だけが必要とされるという考え方が導かれた。このような考え方は、カント的なリベラリズムよりもミル、パーリン的なリベラリズムに親近性を持つものである。

第5章「残酷さと苦痛の減少」と「公と私の区別」においては、第4章において取り上げた「残酷さと苦痛の減少、回避」という論点の源となっているシュクラールの議論からローティがどのように影響を受けているかということの検討を行い、また功利主義との比較とローティのリベラリズムが現代において持つ

意義を考察した。「残酷さと苦痛の減少」という考え方が提出されたのはシュクラの「恐怖のリベラリズム」という論文においてであるが、シュクラもまたローティと同様にミル、バーリンの「消極的な自由」のほうに親近感を抱いている。このように「残酷さと苦痛の減少」を目指すという点においては、ローティとシュクラのリベラリズムは功利主義的な側面を持ち合わせてもいる。しかし、功利主義が「残酷さと苦痛」というマイナス面を減少させた上でさらに「快楽」の増大というプラス面を目指すのに対し、「恐怖のリベラリズム」はマイナス面を限りなくゼロにすることだけを目指するという違いがある。このような形でのリベラリズムは、価値観が多様化した「ポストモダン」の状況においてこそ意義が高まるものとなる。ローティは自らのリベラリズムを「ポストモダニスト・ブルジョワ・リベラリズム」と名付け、公的な交渉の場としての「バザール」と、同好の士が集う私的な「クラブ」が群立するモデルで説明をしたが、このような考え方はロールズの「政治的リベラリズム」に影響を受けたと考えられる。

第6章「プラグマティズムとネオ・プラグマティズム」においては、ローティの掲げるネオ・プラグマティズムとは、パース、ジェイムズ、デューイといった古典的なプラグマティズムとどのような異同があるのかということを検討した。プラグマティズムにおいては真理とは可謬的なものであり、それを信じる、もしくは通用していることが有用であるとされる。ローティは古典的なプラグマティズムからそのような真理観を受け継ぎ、言語哲学におけるクワインなどのプラグマティックな考え方や、ニーチェ、ハイデガー、デリダなどの反プラトン・カント的思想の類似した部分をブレンドさせて、現代においても通用し得る思想としてのネオ・プラグマティズムを構想した。ローティ自身はデューイから最も大きな影響を受けたと公言しているが、現代のデューイ研究者の多くは、ローティとデューイにおける真理観の相違、政治思想における、特に公と私の区別に関する理論的相違などから、必ずしも正統的なデューイの後継者とまでは言えないと考えている。ローティの真理観はむしろジェイムズの宗教論におけるそれに近いと言える。しかし、言語哲学によって席卷されていたアメリカの哲学界にプラグマティズムというアメリカ独自のものを復活させたローティの功績は大きい。

第7章「プラグマティズムと脱構築」においては、ローティと異なった思想的文脈に属しながら同年代で似たような発想を持つ思索を行なったデリダの哲学や、それに付随する政治思想との比較を行なった。ローティとデリダにおける哲学的な類似点は、西洋の形而上学的伝統を批判している、ニーチェのように西洋の形而上学的二元論を「転倒」させただけではなく、二元論的構図そのものから脱している、未来に対してシニカルではなく「希望」を抱いた「肯定」の思想である、というような点が挙げられる。しかし、ローティはデリダの思想を全面的に評価して受け入れているわけではなく、それはカント的な「ノーマル」な哲学に対するヘーゲル的な「アブノーマル」な哲学の関係にある点においては意義があるが、デリダの思想を「準 超越論的」なものとみなす傾向、これを何らかの政治的な思想と結びつける傾向には批判的である。ところが、ローティがこのような結論を下した後にデリダは『法の力』などの政治的な著作に力を入れ始めたため、一概にデリダは政治的なものとは無関係であるべきだと言うことはできなくなってしまった。デリダ的なヨーロッパの思想を地盤に持つ「ラディカルデモクラシー」は、哲学的な面に

においてはローティと共通する点も多いが、政治的に「合意」を目標とするリベラリズムを批判し、「差異」を強調する「闘技的民主主義」を目指す点で異なっている。脱構築の思想やラディカルデモクラシーとの間のこのような形での議論の対立は、具体的な政治運動の実践において左翼論という形で表されることとなった。

第8章「ローティの左翼論とその源流」においては、現代においてかなり独創的に見えるローティの左翼論がいかにして生じたのかという点を探り、またその源流であり、一般的にはそれほど知られていないアメリカの左翼の歴史を辿ることにより、何故ローティの立場が独創的に見えるのかということを考察した。第1章で見たように、ローティの両親とその一族や知人達は左翼的な運動に関わっている人が多く、ローティ自身も幼年期からその影響を受け続けた。ローティはアメリカの左翼を具体的な運動を通して現実の政策に影響を与えようとする「改良主義左翼」、マルクス主義的な「新左翼」、「新左翼」の失敗によって現実的な政治運動から乖離して理論的な考察を行なうのみとなった「文化左翼」の三つに分類し、現代では「文化左翼」が主流となってしまったが、古き良き「改良主義左翼」に回帰すべきであると論じる。「改良主義左翼」とはマルクス主義が本格的に広まるより以前からアメリカに独自に存在した労働運動が母体となっており、その勢力は第二次大戦後に民主党系、共和党系と分かれたものの政権内に影響を持つことにより「隠れた大衆運動」として現代にまで存続し得たのであり、このような歴史理解なくしてアメリカの左翼の立ち位置の独自性は理解できない。ローティにとっての「左翼」もまた、偶然的に受け入れた一つのボキャブラリーであり、様々な解釈学的地平のうちの一つに過ぎない。

第9章「ローティによる道徳思想の再生」においては、ローティのリベラリズム論において提出された他者の「残酷さと苦痛」への共感を出発点として、カント的な「理性」よりも「感情」を根拠とした道徳論を、同様に共感や感情を道徳の根拠としたスコットランド道徳哲学と比較しながら考察した。ローティはカントの道徳哲学のように「理性」と「感情」を二項対立的に区別してしまうのではなく、ダーウィンの発想から「理性」を人間という種の動物が持ち得た高度な「感情」として理解することを提案した。「共感」による道徳といえばヒュームやアダム・スミスの道徳論があり、ローティの考え方は特にヒュームと哲学的に穏健な懐疑主義である点や、自然な感情を重視する点において近いと言える。このような道徳論から、ローティは現代における人権の問題にも一石を投じる。カント的な発想から「理性」の有無によって人間かどうかを見分けるとすると、自分たちから見れば「理性的」とは見えないような異民族や異教徒は、「人間」ではないために迫害しても良いことになってしまう。「共感」や「感情」を出発点とする道徳であれば他の動物にも感じ得るような「残酷さと苦痛」に対する嫌悪によって同種の範囲を広げ得る可能性がある。しかし、逆に言えば「共感」を感じることができる範囲の限界が存在することもまた確かである。

第三部「ローティの思想を貫くものとしての解釈学と物語」においては、「解釈学」とそれに近接した「物語」という二つのタームを鍵として、ローティの思想における一貫性と現代における意義を探った。

第10章「ローティの文学論」においては、ローティが時折見せる文学作品への言及と志向を拾い集め、

それらがローティの思想においてどのような意味を持つかを考察した。ローティはプラトンが哲学と詩を区別したことに反対し、哲学とはむしろ詩的なひらめきを与えてくれるメタファーやファンタジーのような「物語」的なものであるべきだとしていて、英語圏の哲学のように知識の基礎づけを行なうべきものではないと考えた。ローティ自身は「物語」というタームを、道徳的な効用を持つものとしての政治的な効力を持つ「物語」、偶然的な思考を重視するものとして可謬的な真理観を持つアイロニーとしての「物語」的な思考という二つの使用法を行なっている。『偶然性・アイロニー・連帯』においては前者を代表してオーウェルの『1984年』、後者を代表してブルーストの『失われた時を求めて』が取り上げられている。

「アイロニスト」とは『哲学と自然の鏡』における「啓発的哲学者」とほぼ同義のものであるが、哲学者に限らず文学者や精神分析学者、またわれわれの生きる態度なども含まれ、より意味が拡大されたものである。アイロニストのうちの哲学者は哲学を理論化しようとする欲望から逃れきれない場合が多いが、その理論は「物語」とならざるを得ないため、ローティ的な観点によれば、はじめから「物語」を紡ぐ文学者のうちのアイロニストの方がよりアイロニスト的であるということになる。ローティはアイロニストとして、文学作品において作者の意図がただ一つだけ存在し、読者はそれを正しく理解しなければならないという近代的な読解法に反対し、読者による（時に過剰なまでに）自由な読解を推奨している。それに対し、エーコは読者による読解の自由を認めつつ、作者の意図の存在もまた認めるべきであると反論したが、本来のローティの考え方からすればテキストと読者という異質な他者が理に適った形で理解し合うという範囲内での自由さのみが認められるべきなので、あまりに過剰な読解を認めることはローティの勇み足と言えるかもしれない。

第11章「ローティの哲学における解釈と真理」においては、本論文の主要なテーマであるローティの哲学における「解釈学」というタームの位置づけの問題と、それに関連して「事実と価値の区別」の問題、ローティにおける「認識論」の問題、そして真理論の問題を扱った。ローティが「解釈学」の思想家として最も重要視しているのがガダマーであり、『哲学と自然の鏡』における「啓発」という概念もガダマーの「教養」という概念をローティが言い換えたものである。ローティがガダマーにおいて最も高く評価しているのは「事実と価値の区別の撤廃」という点であるが、それは後にローティが掲げることとなるプラグマティズムの三つの条件の一つであり、このことからローティにおける「解釈学」と「プラグマティズム」は少なくとも地続きであることがうかがえる。ローティの「ネオ・プラグマティズム」とは古典的なプラグマティズムとクーン、クワイン、デイヴィッドソンなどの科学哲学と言語哲学におけるプラグマティックな部分を融合させたものであるが、第3章で考察したようにローティはクーン、クワイン、デイヴィッドソンらを、ガダマーがハイデガーの思想を発展させて独自の発想を生み出したプロセスと併置して、アメリカ流の「解釈学」として扱っている。つまり、ローティの言説において鍵となるタームが「解釈学」から「プラグマティズム」へと変化したのは何らかの「転回」が生じたのではなく、それらは一貫したものであり、ジェームズやデューイの思想を取り入れることによってよりアメリカの思想の独自性を打ち出そうとしたことによって「プラグマティズム」というタームを重要視するようになったのではないかと考

えられる。そのため、『哲学と自然の鏡』における結論部分であれほど重要視されたのにその後ほとんど使用されなくなってしまった「解釈学」というタームは放棄されたのではなく、「隠れた本流」として生涯にわたってローティの思想全体を流れ続けたといえる。

第12章「真理の物語論的転回」においては、まとめとしてローティの思想が現代において持ち得る意義について考察した。ローティの思想が持つ最も大きな力とは、真理が100%の正しさを保証されないとしても、それを信じる限りその正しさは保証されるとする、プラグマティックな観点から「ポストモダン」のシニシズムに対して希望と肯定の方向性を示す点である。それを「言語論的転回」や「解釈学的転回」という言葉遣いに倣い「物語論的転回」と名付けた。自然科学においても、クワインの全体論によれば完全に事実と一致する理論を発見することは不可能なのであり、実際のところ理論の有用さに大きな差があるものの「科学」と「物語」の間のはっきりとした境界線は存在しない。プラトン以来、中世の神学、近代の哲学や科学に至るまで、常に曖昧なものとしての「物語」は排除され続けてきた。そのような近代的な衝動はその終着点として「何も信じられるものがない」という「ポストモダン」へと帰結したが、ローティの思想は「ポストモダン」の環境だからこそ自らが偶然的に受け入れたボキャブラリーを解釈学的地平とする「自文化中心主義」を提唱し、相容れない者同士が「残酷さと苦痛」を回避するというリベリズムのミニマムな原則さえ守れば、むしろ自らの「物語」を自由に紡ぐことができると論じている。このように、文化的な生活を送る人間であれば決して逃れることのできない自己の偶然的な「物語」を肯定的に捉えることによって、現代においてシニシズムへと傾きがちな哲学、政治、道徳、宗教を希望と肯定の方向へと転換させることができるのである。

3 論文の意義

本論文は日本においては数少ない、ローティの思想の全体像を俯瞰するものであり、またそのことによってローティの思想が雑多なジャンルを扱っていたとしても、いかにして一貫した議論がなされていたか、ということが理解できるものとなっている。そして、全体像を俯瞰しつつ一貫性を探るという研究によって、「解釈学」と「プラグマティズム」というタームにおける重心の変化と、ローティの思想における「隠れた本流」としての「解釈学」の発想を発見することができた。「解釈学」というタームを鍵にローティの思想の全体像を俯瞰する試みは世界的にも多くないため、(James Tartaglia, *Rorty and the Mirror of Nature*.において「解釈学」という用語に対する評価が大きく変化した点が指摘されている)ローティ研究に対して新たな視点を加え得るものである。

ローティの思想と言えば、まず第一に「プラグマティズム」というタームが思い浮かび、先行研究の多くも「プラグマティズム」を軸としたものである。たしかに、そのこと自体に異論を挟む余地はないのだが、その「プラグマティズム」へと至る前段階として、またアメリカ独自のものとしてだけでなく、ヨーロッパの思想とも源を同じくするものとして、「解釈学」というタームもまた同程度に重要であり、科学哲

学や言語哲学の中にガダマーと共有し得る発想を見出したローティの功績も多いに評価すべきところである。

英語圏の哲学、ヨーロッパ圏の哲学、政治思想などの各ジャンルはそれぞれ分化し、またそれぞれのジャンルの中でもさらに専門的な議論が細分化することによって、学問の全体としては没交渉なものとなりがちであるが、ローティの思想の検討を通して各ジャンルを検討してみると、実際にはそれぞれが異なった文脈を経ながらも、同じような問題意識を共有していたということが理解できる。

アメリカの哲学や政治思想は、日本において一般的にはそれほど知られていないが、本論文においてはローティに至る学説史の研究にも力を入れた。そのため、哲学や政治思想にあまり親しみが無い読者であってもローティの思想がいかなる文脈において論じられ、いかなる意義を持つのかということを順序立てて理解できるような構成になっている。

また、ローティの左翼論を通して、日本においては馴染みの薄いアメリカの左翼運動の歴史や知識人の歴史などを理解し、現代のアメリカ政治の立ち位置がいかなる源流から発したものなのかということを知ることができた。そのことは、いかにアメリカと「対等」な関係に立とうとしても現状では決してその巨大な影響力から逃れることの出来ない日本にとっても一つの指針となり得るものである。